

東日本大震災を契機に美術教育を再考察してからの実践

帝京大学短期大学(講師)・洗足こども短期大学(非常勤講師) 大貫 真寿美

東日本大震災後に「美術教育の意義」について真剣に考えました。そうしないと、自分自身がこの先しっかりとした足で教壇に立てないような気持ちになってしまったからです。今回は、その時の思いとその思いによって実践した内容をお伝えします。



1、自嘲・自称・・・改める

私は現在、帝京大学短期大学に本務があり、帝京大学での授業と帝京大学の必修選択科目の授業と洗足こども短期大学にて造形表現を担当しています。かつて、私は自嘲も含めて「美術の流しのピン芸人」と自称していました。制作発表をさせていただく場面があればどこへでも赴き、幼稚園、小学校、中学、高校、短大、大学と校種を問わず、お声が掛ければその場その場に合わせて、造形表現や図画工作、美術教育の授業をしてきたからです。(もちろん、最大限の努力はしつつ)

2011年3月11日、東日本大震災が起きました。



被災地から遠く離れた東京に私は居住していましたが、私の内にまさしく「激震」が走りました。未曾有の震災を受けた後の被災地の様子が連日報道され、東京でも車のガソリンを購入するのも難航し、計画停電が行われました。夜のイルミネーションは控えられ、東京都心の夜は私が知る限りの中で一番暗くなりました。暖房の電気を節約して室内でダウンコートを着て、明かりにロウソクを使用するなど初めての経験でした。そのような風景や事態を目の当たりにして、「これからの日本はどうなってしまうのだろう？」と考え

ました。東京でも鳴り続ける地震警告音や繰り返される同じコマーシャルに、かつてない不安を覚えました。そして「制作発表をしてきたことや、私がしてきた美術の授業に意義はあるのか？」と疑問すら持ち、今までの私の地盤が崩れるような感覚になったのです。

それは、改めて自分が関わることで社会に何ができるのだろうか？と俯瞰して考えるようになった起因となりました。（それまでは恥ずかしながら、至近距離で美術教育を捉えていたような気がします）加えて、改めて次のことを考察し始めたのです。

美術教育によって得られる社会的に汎用性のある能力ってなんだろう？

ちゃんとその事を美術教育の専門外の方々に公知する事ができるだろうか？

時期を同じくして、様々な偶然が重なり（ここでは省略します）『芸術と社会貢献』という科目名で所属校に授業を開講することができたのです。（もしかして、この時の私は震災によって少し熱が出たような状態にあり、その熱量のまま授業開講希望を述べていたのかもしれませんが。）「流しのピン芸人」などと言わなくなり、しっかりと美術教育の場に立とうと意を決していました。

個人的な気持ちの書き出しとなりましたが・・・そう人間は変わるものでもありません。「出たところ勝負」でもある記録です。

2、「わくわくワーク」のはじまり

「幼稚園へ行き版画を教えることは可能ですか？」と、所属大学の企画から声が掛かりました。しかし、私が幼稚園に赴き版画を幼稚園児に制作を教える？以前の私のやってきたことと変わりがありません。なんだかしっくりとしません。「なんかこう・・・広がりとか・・・もっと何かできないだろうか？」まずは、幼稚園の先生方の版画に対する感想をざっくばらんにお聞きしました。まとめると以下のこの一言に集約されていました。

「紙版画って『版』を子どもたちに作らせることが難しい」

「下絵を子どもたちに描かせ、それを切ったり貼ったりすることが難しく、制作しているうちに、子どもたちも私たちも疲れてしまいます。そして、刷ってみても、下絵の方が良かったと思う作品になってしまうのです。」とのこと。版画の指導法も知りたいという希望もあるようでした。私は「版画はもっと自由に考えてください！版画は版を作りながらできます！それから、もし、よろしければ学生も参加させていただきませんか？一方的に私が教えるというのではなく、先生方からも色々と教えていただけませんか？」と、咄嗟に言葉を発していました。これが、現在『芸術と社会貢献』の授業内で行なっているワークショップ「わくわくワーク」のはじまりです。

3、作りながら考える版画制作

「わたしのびじゅつかん」 (5歳児)

: クリアファイルによるモノタイプ版画と額縁の制作 (60分2回)

※題材名は学生同士で検討し決める

「お化けの額縁だよ～版画が怖いので作れたから。ちょっと怖くて気持ちわるいのがいいなと思って作っている。」 (学生の「子どもの声の記録」より)



参加者

帝京大学幼稚園 パンダ組・キリン組 園児 50名

帝京大学短期大学 人間文化学科 必修選択『芸術と社会貢献』受講生 14名

帝京大学幼稚園教諭 5名

大貫真寿美

※本掲載内容は昨年行ったものです。

用具・材料



I クリアファイルによるモノタイプ版画（60分）

クリアファイル A4 版（2枚に切り離す）人数分

A4 コピー用紙 500 枚（「紙のおかわりを自由」にするために多く用意。版と同サイズ。）

水溶性版画インク 赤・青・黄、バレン

新聞紙、ビニールシート、インク用紙皿、雑巾、クレヨン（記名用）

II 額縁制作（60分）

工作用紙（前回制作した作品（A4）より内寸2センチずつ小さく学生が窓枠を切り抜いたもの）人数分

アルミホイル（約10センチ幅に切ったものとロールのままのもの）、ボンド



手順

- ① 「刷り紙」のコピー用紙はあらかじめ記名をさせてクリアファイルの下に数枚置いておく。
(新聞紙の上に直接クリアファイルを乗せると指で描いたものが見にくい)
- ② クリアファイルにインクをつけた指で混色したり、描いたりして作りながら「版」を作る。
- ③ クリアファイルの下から「刷り紙」を出して上に乗せて、バレン、または手のひらで刷る「版」は雑巾で拭き取り、どんどん作り変える。思いつくままにたくさん作る。楽しむ。発見する。





学生は各班に配置。「『わくわくワーク』は今までの授業で一番に疲れた。でも悪くない感じがする。正直、楽しかった。」「子どもの発想力と勢いが凄い。完全に負けた。」（学生談）



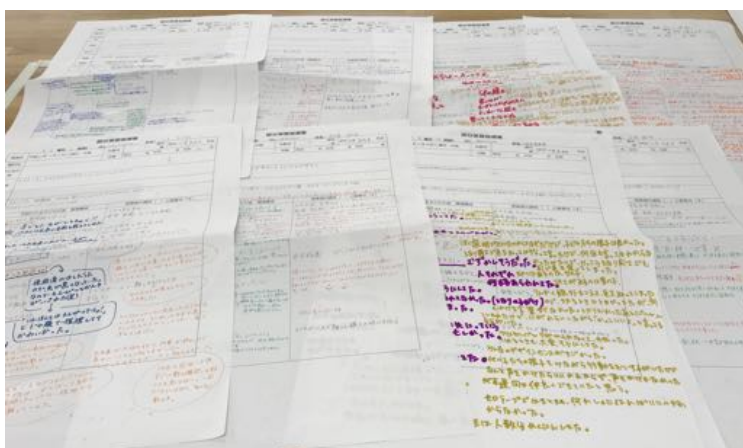
複数制作した版画作品の中から一番お気に入りの版画に合わせて「額」を制作

4、まとめ

「指導案」の錬成

- ① ワークショップ前に試制作を行ってから、まずは指導案を鉛筆で自分だけの力で書く。
- ② ワークショップ後に色ペンで実際の様子や学び、気づきを記入。
- ③ ②の色ペンを変えて、全体の話合いの中で出てきたことなどを更に書き加える。

『芸術と社会貢献』の受講学生はどのような能力がついたのか？



最初は空白の多かった「指導案」が隙間なく埋め尽くされました。学生の指導案も回を経ることに充実してゆくの如実でした。「指導案」を書く能力は間違いなく伸びました。実は、「指導案」を書けるようになったことを学生本人が一番驚いています。

本年度最初に書いた「指導案」

さらに、「社会的汎用性のある能力が Semester 後に伸びたのか？」を他の講義形式の学生と他大学の学生との比較検討を心理学研究者 2 名に行っていただきました。その結果、「自らの目標を定め、主体的に学ぶことができる」という数値が『芸術と社会貢献』の学生が他の講義学生と他大学学生より上昇していました。「主導生」についても上昇しているとの結果でした。

共に制作の時間を楽しみ、共に学び合いの空間

ワークショップ後の振り返りの時間で学生の発言に「子どもの発想が自由で凄いのには驚いたけど、一番驚いたのは幼稚園の先生の対応が子どもに対して意外とクールだったりして驚いた。ついつい優しくしちゃう私たちとは違う。関係が出来ているからできる。」というのがありました。学生も先生方をよく観察しています。私も学生から思わぬ指摘を受けて赤面する場面も多々あります。もちろん！子どもたちから私と学生は多くを学んでいます。今後も共に制作の時間を楽しみ、共に学び合いの時間と空間を構築してゆこうと思います。

最後になりましたが、いまだ大変な思いでいらっしゃる東日本大震災で被災された方々の復興を心より祈念致します。